

埼玉大学文化科学研究科修士課程学位論文・特定課題研究成果要旨

研究専攻（専門領域）		日本・アジア研究専攻		学籍番号	05CS012
氏名	尾崎 百合	ローマ字	OZAKI YURI	国籍 (留学生)	
修士学位 論文名 特定課題研究名	『「五四」前夜の「迷信」「科学」「宗教」について』 ～1918年前後における科学と迷信の論争を中心に～				
提出年月日	2008年1月10日		指導教員	小谷一郎	
体裁 (論文)			言語	日本語	
別冊添付資料等	別表 日本と中国における論争のフローチャート 二頁				
キーワード	中国近現代文学 科学 迷信 1918年 五四				
<p>1915年9月に中国で創刊された『青年雑誌』（後の『新青年』）の中に、発刊の辞である陳独秀の《敬告青年》という文章がある。その内容は、読者に向かって当時の中国が抱えていた問題と、これを解決するための6つのスローガンを提唱したものであった。そのうちの最後の一つである、「想像的でなく、科学的であれ」というそれは、後に1918年を頂点に、「迷信」問題として大きな論議をよぶこととなる。当時の「迷信」は、その定義が非常に複雑であり、従来「封建的な迷信」を含むほか、新興の「迷信」、さらに「宗教」そのものを一括りにして考えられていた。たとえば「霊学」を標榜し、「靈魂写真」などの偽物の「科学」を主張した「上海霊学会」は、『新青年』の記者から「迷信」として強い批判を受けていたし、『新青年』上でも「儒教」を「宗教」と同一視することで、他の宗教すらも「迷信」と見なしてしまうように、当時の「迷信」はまだ「迷信」「科学」「宗教」として未分化であった。</p> <p>この論文では、1918年を中心に起こった「迷信」を巡る論争を考察することで、当時の「迷信」・「科学」・「宗教」がどのようなものであり、またどのように扱われていたのかを明らかにしたものである。中国で起こった「新しい迷信」は、以前からの封建的な「迷信」とは違い、相手（『新青年』側）に具体的な「科学」を要求した。『新青年』はこれに対し、留学先で得た「科学」の知識で以って、「扶乩」や「靈魂写真」といった行為を「全く根拠のないもの」と非難する。また「靈魂写真」の論争に関しては、日本の心理学者や文献を持ち出すなど海外の影響も強く見られる。このことから、中国と日本の論争を比較し、その特徴や違いも検討した。また「上海霊学会」の主要構成員の一人であった陸費逵は、蔡元培と同じ「教育」の立場から、「精神修養」の重視という面で、その思想に共通点を見ることができる。だが「靈魂」の有無という、当時の中国が抱えた「迷信」問題の大きな課題は、二人の間に大きな隔たりを生じさせた。この点においても、二人の考える「宗教」の利点や、彼らの主張する「精神」が何を指し、どこに違いがあるのかを明らかにしている。</p> <p>以上の点から1915年に提唱された「迷信」と「科学」の問題が、1918年前後に流行した新興の「迷信」の論争を経て、「迷信」「科学」「宗教」のそれぞれの定義を再考することとなった。そしてある程度の結果を得たことで、翌年からの「信仰」や「人生観」、「宗教」という問題に間接的に思想の深化を促したのではないかと本稿で結論付けている。</p>					